

全カリ主題別B科目で2020年東京オリンピック・
パラリンピックを考えてみよう

沼澤 秀雄

これまでのオリンピック関連科目と
ゲストスピーカー

全カリでは主題別B（旧、総合B）の科目において、2010年よりオリンピックに関わるテーマの授業を設定してきた。これには兼任講師を引き受けていただいた日本オリンピックアカデミー理事である筑波大学の嵯峨寿先生の協力によるところが大きく、多くのオリンピックに関わるゲスト・スピーカーを招聘することができたということが授業を成立させた要因であった。

2010年の「オリンピックをめぐる心象風景」では、本学にも在籍していた元国際オリンピック委員会副会長の猪谷千春氏、日本オリンピックアカデミー会長で元国立スポーツ科学センター長の笠原一也氏、外務省外交官で元ギリシャ大使の望月敏夫氏が来校して、国際オリンピック委員会の実情や2016年の招致活動について話していただいた。2012年の「オリンピック・インパクト」では、元NHK解説委員の西田善夫氏やオリンピック研究者の中京大学の来田享子先生、首都大学東京の舛本直文先生、フェリス女子大学の和田浩一先生に登壇いただき、近代オリンピックとはどのようなイベントなのかについてお話していただいた。2013年の「2020年東京オリンピック招致のゆくえ」では、東京オリンピック・パラリンピック開催の意義や是非について、前述の招致関係者やオリンピック評論家の伊藤公氏に話していただいた。また、アフロ代表取締役の青木紘二氏に

迫力あるオリンピックの写真を見せていただきながらオリンピックの魅力を語っていただいたことも印象に残っている。このように2020年の開催都市が東京に決定する以前にもオリンピック関連科目を設定し、オリンピックと社会・文化との相互作用について講義、解説を行ってきた。

授業では特に課外活動でスポーツに取り組んでいる学生を対象としているわけではなく、むしろ様々な学部、学年の学生が集まり、それぞれの立場でオリンピックについて考え、大規模スポーツイベントとしての意義や価値などについて客観的にオリンピックを捉えていたようだった。

東京オリンピックのレガシー

我が国ではじめて開催された1964年の東京オリンピックのレガシーを掘り起こし2020年のオリンピック・パラリンピック開催に向けて、スポーツ文化、国際交流、観光資源、都市計画など大学生が新しい発想のなかで、開催されることの意義を考えながら、どのようなレガシーを残していけるのかを検討することを目的として、2014年度の春学期にこの授業を開講した。

授業は4月12日、4月26日、5月17日、6月7日、7月5日の5日間ですべて3限、4限、5限の時間帯で行なった。受講人数は65名で池袋キャンパス学生と新座キャンパス学生がほぼ同数であった。1回目、2回目、5回目は池袋キャンパスの8号館教室で、3回目は

国立競技場横にある日本青年館会議室で行い、その後に国立競技場から代々木体育館までを歩き、都心のスポーツ施設を観て廻った。(写真1) 4回目は駒澤公園陸上競技場会議室に集合して、公園内の施設とオリンピックメモリアルギャラリーを見学した。(写真2)



(写真1) (新宿区霞ヶ丘町) 国立競技場となりの絵画館前より



(写真2) (世田谷区駒澤オリンピック公園総合運動場内) 東京オリンピックメモリアルギャラリー

初回の授業ではゲスト・スピーカーの荒牧亜衣先生から、レガシーの概念として5つのレガシー 1. スポーツレガシー (スポーツ施設、スポーツ振興) 2. 社会的レガシー (教育、文化、) 3. 環境レガシー (都市再活性化、環境エネルギー)、4. 都市レガ

シー (都市開発)、5. 経済的レガシー (経済振興、観光振興) について、レガシーを評価する枠組みとして <効果> 正か負か、<形> 有形か無形か、<対象> 公的か私的か、<範囲> 地域的か世界的か、<時間> 共時的か通時的かなどについて講義していただいた。

また、和田浩一先生には近代オリンピックの提案者であるピエール・ド・クーベルタンはオリンピックを開催することで何をしたかったのかについてお話いただいた。「より速く、より高く、より強く」「オリンピックは参加することに意義がある」と謳われたオリンピック精神は、本来、勝利や記録向上を目的としたものではなく、スポーツによる若者の国際交流を通して世界平和に貢献するという教育的な思想であったが、現在の大会がそれに沿ったものになっているのかという問題提起がなされた。

コンペティションによって選出されたザハ氏の新国立競技場のデザインとそれを建設することでどのような問題が生じるのかに関することについては、1964年開催の国立競技場や代々木体育館などのオリンピック施設と比較しながら、建築の専門家である明治大学の南後由和先生に説明していただいた。

また、現在の明治神宮外苑の地域は風致地区として特殊な都市、造園計画によってつくられたということ、東海大学の田中伸彦先生に話していただき、当時のレガシーについて考え、引き継がなければならないもの、2020年に出来ることなどについて検討した。

4回目の授業では1964年の東京オリンピックを直接体験し、運営にも関わった元国士館大学大学院教授の坂田信久先生に貴重な体験談をお話しいただ

いた。

学生のプレゼンテーション

オリンピック・パラリンピックの東京開催が決まったからなのか、受講学生の学習意欲は非常に高く、最終回に実施したオリンピックレガシーツアー企画プレゼンテーションでは様々な発想のレガシーツアーが提案され、機会があればオリンピック組織委員会に紹介したいと思うようなものもみられた。以下は最終回の「私が望むオリンピック・パラリンピックのレガシー」「オリンピックレガシーツアー」におけるプレゼンテーションで提案された内容の一部である。

- ・ 1964年大会のシンボルマークとポスターは亀倉雄策というグラフィックデザイナーが制作した。当時、デザインの面では欧米の先進国に劣ると思われていた日本から斬新なポスターが発表され、世界を驚かせた。日本のクリエイターがこのような独創的なデザインをオリンピックで紹介できるようにする
- ・ ピクトグラムが標準化されたのは東京オリンピックが世界初、開発したのは日本人である。日本のおもてなしの心が後の日本や世界に広まった。お金儲けではなく世界のためになることを考えていた（図1）
- ・ 東京は最もミシュランの星が多い都市である。この料理のレベルの高さをオリンピックビレッジの料理に応用する
- ・ 誰もが「一人間」として扱われるダイバーシティかつマイノリティ不在の社会を目指す
- ・ オリンピック・パラリンピックは東京開催であり日本開催でもあるので訪日外国人と地方を結ぶハブの役割を東京が果たす



（図1）ピクトグラム 様々な言語で標識を作ることが出来ないので各国の人がみてわかる図を開発した。普及させるために著作権を放棄したとされている

- ・ IT製品からのアプローチによる若者から高齢者までの生活活性化、企業の持続的価値創造を目指す社会
- ・ オリンピック会場を舞台に「体験する・学ぶ・食べる・集う」に関するソリューションを提供する
- ・ 無線LANによるタブレットタクシーで外国人をおもてなし

おわりに

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は全国の大学、短期大学と連携協定を締結し、大会に向けてオリンピック教育の推進やグローバル人材の育成などで各大学の特色を生かした取組みを進めていくことになった。2014年12月現在764大学が提携大学となっているが本学もコミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科が提案して、2014年6月23日に組織委員会と協定を締結した。しかしながら、組織委員会からはポスターやイベント情報などが提供されるだけで、大学としてどのような取組みが出来るかといった具体的なアクションを起こすこ

とにはいたっていない状況にある。そこで、全カリで以前より展開している主題別Bのオリンピック関連科目において大学からオリンピックムーブメントを発信し、どのようなオリンピック・パラリンピックが出来るかを考えていきたい。2015年度については授業のタイトルを「オリンピック 東京からTOKYOへ -2020東京オリンピック・パラリンピックの開催でなにが変わるのか-」（いつも授業タイトルが奇抜すぎると注意を受けている）として1964年の東京オリンピックを振り返りながら、何を遺して、何を新たに作っていくのかについて考えていく。最終的に学生から「こんなオリンピック・パラリンピックにしたい」という提案が出てくることを期待して準備に取りかかっている。

ぬまざわ ひでお
(本学コミュニティ福祉学部教授)